

## 第五章 海岸方面の諸救援

## 第三節 東洋汽船株式會社の救援

## 一 くれや丸

九月二日正午、北米に向ひ出帆の豫定で、本船は當時横濱港第四號岸壁に繋留中であつた。大震と共に、同岸壁は一面に崩壊し、船側に衝撃したので、船體數十度の傾斜をなして、外板に鈔からざる損傷を蒙つたが、幸にして浸水する程度に到らなかつた。間もなく各處に燃上る猛火に攻め寄せられて、避難者は、雲霞の如く岸壁に密集し、火の手は當に第四號岸壁の税關上屋に襲來せんとする物凄く有様になつた。折しも當直運轉士は急遽機關用意を命じ、當社所有の小蒸汽船吾妻丸及び都丸と、必死協力し、港務部長警察部長當社員外一千八十二名の避難者を救助收容し、既に甲板の各處を襲ふた飛火を消火しつつ、港内に渦巻く猛火と烈風とを冒し、大小船舶の間を縫航して、港外の安全錨地に避難した。實にこれや丸は、大震後逸早く多數の市民を救助收容して、港外に避難せしめた第一船である。同船の機敏なる行動を觀收した港内碇泊の諸船舶は、執れも先を競うて港外に避難した。

斯くてこれや丸は、直に海事關係諸官廳の本部假事務所となり、本船無線電信を以て横濱の災害状況を阪神地方に打電したのである。蓋し大震後横濱からの第一信はこれである。其後本船は九月

十二日迄、港務部、税關海事部等の事務所となつて、海上行政の中樞機能となり、猶三千八百五十名の避難者を救助收容して、奉公の任を果したことは、目覺しきものである。

前記の如く、本船は震災に因り船體に損傷を受けたので、入渠修理を要するから、直に定期航路に就航するを得ないので、本船に搭載したるホノルル北米行船客は、同月十七日横濱發の春洋丸に移乗せしめ、同月二十日神戸行罹災民三百二名を搭載して、横濱を出帆し、神戸に於てホノルル北米行貨物をサイベリヤ丸に積替の目的を以て、荷揚をなし、同月二十六日長崎着、目下同地三菱造船所に於て修繕中である。而して本月二十五日頃修繕完成定期航海に就航の豫定であつた。據りて事變の爲に、定期航海を五十三日間、休航の止むなきに至つたのである。

## 二 大 洋 丸

九月七日、北米から横濱着罹災民清水行二千五百五十名、神戸行二百五十名、計二千八百名を搭載して、同九日横濱發、右兩地にて罹災民を陸揚して、同十七日再び横濱に歸港、燒跡棧橋に繋留して、更に罹災民清水行及神戸行二千二百七十三名を搭載し、同二十日横濱を出帆した。是れ震災後棧橋に繋留した第一船である。而して横濱港は震災のため荷役不能となつたので、北米積横濱揚貨物は全部、神戸に於て陸揚をなし、同二十五日神戸を發し、十五日を経て就航した。

## 三 明 洋 丸

九月二日神戸發、唐津經由大連に向ふ筈であつたが、救助米五千八百四十一噸を神戸に於て積載、五日神戸發、七日横濱着第二號岸壁に繋留陸揚した。是れ震災後岸壁に繋留した第一船である。同二十三日陸揚を終へて、横濱發同二十五日神戸着、同二十八日大連に向け發航豫定の航海に就航した。是れ又事變の爲に、二十三日間を休航した。

#### 四 春 洋 丸

本船は基隆に於て、内地米百石、臺灣米百石、生魚二千五百斤、芋二千斤、味噌四十樽、梅干二十樽、澤庵二十樽を積取り、上海寄港を省略して、長崎に於て上海行船客一等四十六名、二等二十一名、三等三十九名、計百十六名及びマニラ積果物約三百噸を陸揚して、上海行汽船に移乗せしめ、神戸を経て、同月十二日横濱に着し、同十七日北米に向け發航した。據つて事變の爲に遅滞したること二日である。尙本船は震災後、横濱より輸出品(生絲)を船積した第一船である。

#### 五 安洋丸 香洋丸 福洋丸

安洋丸は三日、香洋丸は五日、福洋丸は五日の滞船をなした。

已上の如く、震火災事變に際して、海陸員一同が殆ど私事を顧みることなく、誠意内外の公務に全力を傾注したることは、誠に銘記すべき光榮事であらう。

#### 六 震災直後同社の致されたる通信狀況

九・月・一・日　これや丸は港外に避難したのであるから、取へず陸上の通信状態を確知するの必要を認め、午後二時四十分、銚子局に之を質した。然るに千葉迄の通信連絡は異状がないが、東京其他の方面へは全然通信杜絶であると云ふ報に接したので、同方面の被害尋常ならずと察知したのである。

午後八時に至り、當時既に假事務所をこれや丸に設置してあつた港務部税關、海事部警察部から、救済に關する重要電報の信頼に會ひ、直に潮岬無線局との通信連絡を計らんと努力したが、混信に妨げられ、午後九時二十分に至つて、辛うじて通信し得たのである。即ち警察部長發、港内各船船長宛、

陸上の罹災者救助の爲め、炊出しの要ありと認め、本船に於ては食料全部貨物米をも提供し、明朝より陸上に配分することに決定せり。貴船に於ても人道の爲め、之と同様の處理を乞ふ。尙

ほ御決定次第、何分の御返事を乞ふ。

又軍艦及横須賀鎮守府宛、

横濱市に本日正午大地震あり。引續き火災を起し、全市火の海と化し、死傷者の數何萬なるを知らず。救護の要あり。御配慮を乞ふ。

等の通信を初めとし、九・月・一・日には、和文十二通(二七八信、歐文一通(二七七語)を發信し、和文二通(二八八信、歐文一通(二六六語)を着信した。九・月・二・日には、和文十八通(三三二信、歐文六通(二八二語)を發信し、和文十通(二二二信、歐文三通(一七〇語)を着信した。九・月・三・日には、清水水産試験所關西方面、安中及日本無線(東京方面)との通信を含み、和文十八通(二〇九信、歐文七通(一五九語)を發信し、和文三十四通(五八一信、

歐文三通(二九語)を着信した。九月四日には和文十七通(二七一信)の発信と、和文十三通(二九五信)の着信があつた。九月五日には震災當時から引續いて通信に従事したのであるから、會社も豫備無線技士を召集して、應援に當つたが、尙ほ手不足であつたので、官廳の命として、羅州丸南洋丸から、無線技士の出張應援を乞ふた。

各艦船宛、港務部長發は、

野島以北東京灣燈臺破壊の虞あり。

の局外放送を含み、和文二十二通、三四二信、歐文一通(九語)の発信、和文十四通(二一六信)、歐文三通(二五語)の着信を取扱つた。九月六日午後七時、銚子無線局から、警城無線を経由して、

東京との連絡開通せり。

との報に接したので、安中及無線への放送を中止した。午後三時官廳の命に依り、應援を乞ふた前記無線技士を、夫々所屬船に歸船せしめた。此日和文十八通(二八一信)、歐文五通(一一四語)を発信し、和文十通(一四六信)の着信があつた。

九月七日には、和文十一通(八四信)、歐文一通(五一語)を発信し、和文十七通(五〇信)、歐文三通(一二六語)の着信があつた。九月八日には、混信防響の爲め、港内碇泊内外軍艦、商船へ、軍艦は奇數時に、商船は偶數時に、通信勵行ありたき旨、軍艦玖摩司令官から、港務部長を通じて、通達があつたので、QSTにより、號外の形式にて、其旨放送をなした。又港内外に船舶が輻輳したから、各船長宛、港務部長發、

本日午後、又は明日中に、降雨又は風雨ある模様あり、注意あれ。

の放送を含み、和文六通(六一信)を発信し、和文四一通(五七五信)、歐文二通(三八語)の着信があつた。九月九日には、和文九通(一一三信)を発信し、和文二四通(四七七信)の着信があつた。九月十日には、本船コレヤ丸に在る縣廳稅關、港務部海事部事務所は、十二日正午を以て、三島丸に移轉のことに決定したので、其旨銚子潮岬局へ局報を以て報した。此日和文十一通(九二信)、歐文一通(一二語)を発信し、和文三十通(四二〇信)、歐文三通(七〇語)の着信があつた。

九月十一日には、和文六通(五六信)の発信あり、和文十三通(一六一信)、歐文一通の着信があつた。九月十二日には、正午官廳假事務所を三島丸に移轉して、通信閑散となつた。此日和文四通(三二一信)、歐文一通(六語)を受信し、和文七通(六五信)の着信があつた。

斯くして本船コレヤ丸は、九月二十日正午、神戸に向け横濱を出帆したのである。

震災當時からの通信は、各艦船との混信及雷鳴のため全く通信杜絶するの有機に遭遇する事何十何百回たるを知らなかつた。而かも官廳からの発信、官廳への着信等に少しの遺漏もなく當つたと云ふ事は、全くコレヤ丸無線局員の努力の外はない。殊に關西方面への第一信によつて、此大震災の報を齎らしたのは、實に同社の光榮であつて、又罹災地民の蒙つた恩恵も銘記すべきものである。

(東洋汽船株式會社報告書)

## 七 同社ボートキャプテン等の執りたる應急救援行動

東洋汽船會社の救援

災害と同時に市内各方面より雪崩れ来る避難の群集が船へ船へと混亂殺到した有様は前記に依つて大略は知り得らるる所であるが茲に特記を要するは横濱ポートキャブテンの必死の行動である。當時同社長淺野總一郎氏神奈川縣安河内知事矢澤港務部長大川水上署長等に宛てたる報告書なるものが其行動の一斑を知こるが出来るから記載しやう。

### 報 告 書

大正十二年九月一日午前十一時五十八分の大震災當時東洋汽船株式會社横濱ポートキャブテンとして奉職し、四號岸壁繫留の社船コレヤ丸に輸出貨物積載の監督中につき、同船一等運轉士菊池勇と協力し、船員其他を指揮し、救命艇を下し、岸壁崩壊と同時に海中に墜落せる荷役人夫、其他を救助し、コレヤ丸に收容し、切斷されたる繫留索を取直し、陸上より續々避難し來れるもの約四百名を收容し居たるも、火災益々擴大し、火炎飛來り、既にコレヤ丸甲板日覆に點火するに及びたるを以て、一等運轉士を助け、繫留索を切斷し、四號岸壁より離船し、辛うじて港外に脱出、投錨避難せり。而して一等運轉士菊池勇機關長堀章二郎、船醫染谷和雄と協議し、北島五等運轉士田先豫備水夫長船夫永夫機關士油差赤井豫備船醫水上署員より成る救助隊を作り、自らその隊長となり、折良く重傷者を乗せ避難し來れる發動機船を利用し、風浪火炎を犯して水上署裏の小蒸汽碇泊所に至り、會社小蒸汽吾妻丸に出動を命じ、直ちに會社小蒸汽都丸に轉乘し、諸員を指揮して之を操縦し、救助に向ふ。最初に東洋汽船會社調度課長齋藤作藏、同豫備機關長西大條宇、外八名

を救助し、進みて二號岸壁附近に至り、避難民の充満せる舢を發見し、コレヤ丸に曳船して、水上署巡查部長仁田萬東洋汽船會社參事大胡強、同保船課長市岡昇、同文書課長林幹太郎、外約三百名を救助收容し、再び空舢を曳きて、第二回の救助に赴き、一、二、三號岸壁附近に集團せる貨物滿載せる舢上に救を求めつつあるものを悉く收容し、重傷者神奈川縣港務部中世古庶務課長、外二百名を助け、五號岸壁突端に至り、最後の生存者コレヤ丸二等大工を收容し、税關監視部附近には、人影を認めず。且つ七號乃至十二號岸壁附近のものは、郵船會社商船會社其他の小蒸汽船に救助せられつつありとの申立に依り、救助を中止し、コレヤ丸に曳船し、收容救助す。時に午後八時餘、風浪未だ止まず。殊に防波堤内浮流物沈没等の危険物多く、暗夜の航行、絶體不可能なるを以て、救助隊を解散す。

先に小職が出動準備を命じたる會社小蒸汽吾妻丸は關東運輸會社員成宮養六操縦の下に、會社荷客係長松本徹居、同船客課長黒澤精次等數名を救助避難し來るを以て、幸に焼失を免れたり。而して參集各課長及一等轉士と合議の上、機關長船醫瀧澤調度課員福田首席事務員其他船員全部と一致協力し、避難民の整理に勉め、食事に、休息所に、醫療手當に、看護に、人名住所調に、全力を盡して奔走す。

斯くして午後十時半に至り、個人關係、會社關係を視察せんとするもの、七名是非上陸したしとの申出に依り、當時乗船せる森岡縣警察部長に對し、多少なりとも縣警察の連絡を計らんと考へ、

その許可を得て、山下埋立地に上陸し、關外關内は火災のため危険にして、近づくべき途も無きを以て、比較的安安全全ならんと推定せられたる本牧方面に至り、十二天及本牧交番に出頭し、警察部長はコレヤ丸に於て、健全に執事なる事を述べたる上、各方面に對し通報せられん事を依頼し、且つ其の援助を得て、徹宵小港、十二天本牧間門方面を視察し、翌九月二日午前六時、山下埋立地に於て、消防署警部を發見し、直にコレヤ丸に同行、警察部長に對し、委細報告をなし、聊か縣警察の指揮命令統一に貢献せり。

其後會社の許可を得て、矢澤港務部長の下に、臨時港務部員の職を執り、船舶出入調査、錨地指定、積荷明細表徵集、小蒸汽船徵發、避難民輸送をなし、九月三日、大阪商船會社汽船巴里丸積載精米の徵發せらるるに及び、成富養六と共に港務部荷役係となり、成富養六は人夫揃集、解船寄集等に、小職は人夫輸送、その食糧手配、解船曳廻等に當り、専ら揚荷に従事せしも、當時人心恟々として、何等の安定なく、殊に人夫の如きは、事毎に興奮して、暴力を振はんとし、又陸上よりは、或は官公署の名を騙り、或は多人勢を擁し、或は兇器を持して、揚荷米を掠奪せんとするもの來り、危険此上もなき間に處して、死を決し、辛じて其職務を全せり。其後軍艦山城の兵力援助を得て、大に荷役の進捗を見、次で揚荷輸送陸揚は、海陸軍のなす所となるに至り、成富養六は、棧橋司令官、玖摩艦長、高橋大佐に屬し、後横濱市の囑託となり、小職は依然荷役係として、港務部に勤務し、爾來二十有七日間、公私協議會相談會に出席し、矢澤港務部長、飯田税關監視部長、上田税關技師、海上輸送指揮官代理

安藤中佐、棧橋司令官、高橋大佐、森田市吏、成富市囑託の間を斡旋し、或は交渉員となり、或は案内者となり、救助品陸上に没頭し、九月二十七日、諸般の設備殆ど常態に復せんとし、陸海軍又撤退し、陸揚は總て現業部の請負ふ所となるに及び、九月二十八日、港務部補佐を免ぜられたるを以て、會社に復命し、再び會社ポートキャプテンとして奉職するに至れり。

尙小生の目撃して、衷心より感謝の意を表し、居るもの、陸海軍は別とし、官憲として、矢澤港務部長、飯田税關監視部長、上田税關技師、船舶出入、避難民輸送、救護品陸揚等に對し、各個人各會社の各官署の忠告請求を納れ、種々加減按配して、些の不平無からしめたと、森田横濱市通譯の活動、水上署巡查部長、仁田萬の精勤にして、個人としては、成富養六の人夫手配、揚荷按配、養俠努力、コレヤ丸一等運轉士、菊地勇の避難民收容處置に、萬遺憾なかりし事、及救護品を搭載し來れる米國御用船乗組員の眞情よりの努力提供なり。

右乍率爾報告す。

大正十二年十月十四日

東洋汽船會社横濱荷客係勤務

甲種船長 正八位海軍豫備少尉 宇野常司

## 第二節 日本郵船會社近海郵船會社の救援

## 一 緒

## 言

郵船會社は地震直後快速船長崎丸上海丸を長崎上海航路より引揚げて京濱神戸間の連絡に従事せしめ品川神戸兩地を隔日交互出帆の事とし更に博愛丸弘濟丸を以て新に品川清水間の連絡を開始し毎日交互に品川を出帆せしめて救済品の運搬罹災者の輸送に當らしめ又非常船線を斷行し機宜の配船を行ひて避難民及救済品の運搬に努力し芝浦には京濱船係本部を移して荷役配送に便し船客係員を派出して同地乗船の避難者總計約七千餘人の輸送を圓滑ならしめたるのみならず更に船醫數人を出動せしめて炎天の下に雲集せる待合の船客等の救護に従事せしめ幾多の傷病者に手当を施し九月十一日軍艦比叡の汽艇が芝浦に於て衝突沈没の際には溺水將士の救護をも援助した。神戸を中心とする避難者移送の成績を見るに九月二十七日迄の間に依れば内外國汽船總計六十六隻噸數約十四萬七千噸を以て前記總數の過半二萬二千餘人を輸送し又九月二十日迄に大阪神戸を中心として京濱へ向け米を輸送したる總計は二十二隻總噸數約九萬二千噸を以て四十八萬八千二百六十六俵に達した。

尙兩社が震災當初に於て多大の困難を排し救済の爲め活動した一端を記さば、横濱に於て修理中の郵船三島丸丹後丸の如きは地震と共に繫留岸壁が崩壊した爲め繫索折斷し

て漂流せられたにも拘はらず咄嗟の間克く避難者を收容して多數の生命を完うせしむるを得た。就中三島丸は一時約三千名を收容し而も内約五百名の負傷者に對し夫々手當を加へた。又同には最初搭載せる糧食及飲料水の殘餘日々乏しく爲に一時は六郷川の水を汲取る計畫を立てた程の窮狀に陥つたが幸社船山城丸が食糧を満載し救助船第一船の榮譽を擔ひて神戸より九月四日横濱に入港し荷役不可能の折柄三島丸へ横付し水火夫の手を以て糧食並に飲料水を支給し其他碇泊船にも分與するを得た。當時避難者は一般に飲料水に渴えて居た折柄三島丸の避難中流涕歡喜したるものもあつたと云ふ。

右の外近海郵船の備後丸は兵庫縣應發送の糧食五百噸並に京濱方面在住者の親戚故舊より成る船客七百餘名を搭載して三日神戸を出帆し海軍當局の多大の好意的援助を得て横濱經由品川に到り夫々陸揚を終り歸航には避難臺灣人學生又一般避難者一千二百名を搭載して七日品川發神戸に向つた。本船が始めて品川沖に到着するの報傳はるや臺灣總督府東京出張所に磨集せる避難臺灣人學生は狂喜して萬歳を高唱した程であつた。

又兩社が支那人避難者を上海に送還した總員數は約三千名に達した。其一例として近海郵船の千歳丸の如きは九月十八日六百五十名を搭載して神戸を出帆し無事上海へ輸送を終り更に長崎へ引返して同地より復た五百三十名を上海へ輸送した。此輸送は支那官民に對して深甚の好意を與へ日貨排斥の折柄にも拘はらず上海埠頭に於て支那人の口より日本萬歳の聲さへ響き渡り排日氣

分は之が爲め全然一掃された感があつたと云ふ。上海に於ける支那人震災救護會々長又副會長は、連署を以て懇篤なる感謝狀を寄せられた。之を要するに、日本郵船及近海郵船が、今次の非常天災に際し、運輸交通會社の本分に顧み、克く奉公的努力を竭した一斑は、前陳の如くなるも、更に本店並に横濱支店員等は、或は住宅の喪失破損を顧みず、或は家族の死亡危殆を慮らず、關係支店員亦寢食を忘れ、私事を抛擲して、一般の救恤的輸送事務に従事し、又關係各船の船員等は、上下協力して、幾千の避難船客宮崎丸の如きは、一船一時三千五百人の多數を搭乗せしめたの乗下船供食方等、萬端に多大の辛苦を排して、極力便宜を圖り、飢餓に迫れる多數の者に、熱き握飯を供する爲め、手を爛らした者があつた。又幾百の乳兒に供給するミルクの調合に忙殺された状況等に至りては、到底筆紙の能く盡す所でない。九月十八日、芝浦出帆の長崎丸に搭乗せられたブラジル公使チャーモント氏夫妻、ジャパンアトバタイザー社長フラインシャー氏、其他四氏は、此等の現状を目撃し、連署して誠心誠意、感激嘆稱の辭を郵船會社に寄せられた。

## 二 同社横濱支店の救援

九月一日正午、俄然として猛烈なる大地震起り、上下竝に水平に家屋を震動する事瞬時にして、横濱の全市の家屋殆ど悉く一時に崩壊し、當社横濱支店横濱市海岸通三丁目四丁目本館煉瓦二階建の大建築は、屋根の全部及び二階の一部、別館は屋根の一部及二階の一部、船舶用度建物は屋根の殆ど全部

崩壊し、凄愴の狀言語に絶した。此間多數社員は、別館階上食堂にあつた。同所の被害が比較的少かつたので、大部分は逸出し得た。唯本館は其崩壊最も早く、且つ激しかつたので、此處に執務中の社員若しくは來客は、逸出の機を失し、遂に慘死若しくは重輕傷の悲運に逢着したもの、割合に多かつたのは、天災とは謂ひながら、誠に遺憾痛恨の至りである。

斯くて激動引續き生じ、地上は龜裂及陥没を生じ、加ふるに四方より火災起りて、刻々危険近づいたので、既に各自諸方に避難したものもあつたが、會社前の道路に集合せる約四十名の社員は、重輕傷者を救助した後、一隊となつて、新港方面に逃げた。是れ實に十二時三十分である。當時岸壁に社船三島丸及丹後丸の兩船が繫留してあつたので、難を之に避けんと欲し、一同之れに進んだが、岸壁は既に全く崩壊して、兩船は之が爲め陸を離れて、到底近づくことが出来なかつた。然るに午後二時頃より、猛風俄然として起り、火焰は海面に向つて襲ひ來り、是に於て此等社員は、多數の一般避難者と共に、殆ど逃るべき道なく、何れも生死の境地に彷徨し、殆ど全く絶對絶命の窮狀にあつた。自然隊伍亂れて、各自自由行動を取るの外なきに至つた。然れども辛うじて内十六名は、大阪商船巴里丸に、其他は社船三島丸丹後丸等、又は内外汽船に救助收容せらるる事を得た。其間各所に悲劇頻りに起り、其慘狀到底筆紙に盡す事が出来なかつた。斯くして夜八時頃に至り、此等避難の社員を、殆ど全部三島丸及丹後丸に移乗せしむるを得た。時に兩船に避難せる社員合計六十名であつた。此他一般避難者のみでも、三島丸に收容せられた者約千五百名に達して居た。尙其他避難民は、當時港内碇泊中の社船

六甲丸、リオン丸及筑波丸等に夫々收容し、何れも船室甲板全部を開放して、是等救助に努めた。茲に横濱支店幹部及三島丸役員全部、同船船長室に集合して、幹部會を開き、諸種の應急策を協議した。斯くて夜半十二時、曳船永代丸を仕立て、社員四名乗船、東京に急派し、當地震災の状況を本社に報ずると同時に、本社の安否を知らんとしたが、芝浦方面は既に木材舳船漂流して、水路を塞ぎ、到底上陸するを得ず、水上署及市役所の小蒸汽船に乗船せる署員、竝に吏員に就き、東京の状況を聞糺した所、東京も亦全滅との情報を時て、一層悲凄の感に打れた、已むなく翌日歸濱した。

是に於て九月二日早朝より、社員を九隊に分ち、市内各方面に分派し、一般震災状況の調査社員及其の家族の安否、及一般避難者の救助に努めしめた。發するに先ち、社員三島丸喫烟室に集合し、今回の大震災は實に我國有史以來、未曾有の大慘事にして、此國家非常の秋に際し、吾人は單に一身一家の安危をのみ顧るべきにあらず。正に義勇奉公の大任を盡すべきの秋なるを以て、宜敷各自は單獨の行動を止め、協力一致、以て私を捨て、公に殉ずるの覺悟を以て處せざるべからざる旨を誓言した。社員は未だ其家族の安否をすら知らぬ。而かも今茲に隊を作りて一般搜索に従事せんとした。當時の緊張せる各自の氣分は實に悲壯を極めたのである。是等の搜索隊は、急造の紙製の二引の社旗を翻し、各十個の握飯と、一瓶の清水を携へ、午前八時、本船を出發し、主として避難者の群集せる地點を訪問して、救援に努めた。社旗を見て群集中より飛び出して救を求めた該社海陸社員屬員及び其家族、及一般避難者は妙くなかつた。

是等は皆三島丸舟後丸及六甲丸に夫々收容するを得た。此夜より所謂鮮人暴動として傳へらるる所の暴動、各所に勃發し、到る處銃劍竹槍の類を以て相争闘し、死傷少くなかつた。陸上の秩序は全く亂れ、市内混亂して、全く無政府無警察の狀を呈し、横濱船渠會社在庫白米若くは税關構内に燒殘つた上屋内の貨物は悉く掠奪せられて、一物をも留めず、殊に此現象は其後數日間持續したので、個人の住宅に侵入して掠奪を恣にするものさへ生ずるに至つたから、一般罹災民の三島丸等に避難するもの刻々増加し、其三島丸のみにて一時は三千名以上に及んだ。此等避難民は心身甚だ不安、且つ節制なきを以て、失火其他船内の危険を慮り、併せて衛生の注意、秩序維持の必要ありたるを以て、本船當直の外社員九名を四組に分ち、相交代して不寢番に立ち、船内警備に任せしめた。斯く船内に殘留して公共の爲め執務の社員中には、未だ家族の安否さへ分明ならざるものがあり、其奉公の義氣は誠に銘すべきものであると思ふ。

九月三日、三島丸に收容せる避難者數は前述の如く三千名に達し、本船に殘留する糧食飲料水甚だ乏しく、爲めに一日二食とし、一食に握飯一個、水一杯を與ふる事とし、上下悉く之を實行したけれど、限られた食糧を以て、此儘に推移せんか、船内の總員は忽ち飢渴に瀕せねばならぬ。殊に飲料水甚しく缺乏した。是に於て本船幹部は、絶えず之が對策に腐心し、結局本船の水泳用カンパスを舳舟に積入れ、六郷川に溯行して河水を汲取ることより外なきを以て、明日之を斷行する事とし、諸種の準備に着手した。而るに偶、港内の一隅に繫留せられた水船があるのを發見したので、之を本船側に曳き來り、



飲料水を本船に移すを得た。其量僅に五噸に過ぎなかつたけれど、社員の歡喜は一方ならなかつた。一般避難者中落涙せるもの尠ならず、船内窮乏の狀は是で以て知るべきである。

此日阿蘇丸は名古屋より入港し、一般荷物の外、救恤用として六十俵の白米を同地支店より送附した。其敏速であつた事は彼等の最も感謝した所ではあるが、當時荷役力全く斷絶し、人足及舢舨を得るに由なく、之を積卸す事を得なかつた。而して當時三島丸の糧食は大に缺乏し居つたけれど、碇泊中の大阪商船巴里丸は、五千俵以上の白米を、荷物として所有し居つたので、萬已むを得ざる場合は、之を徵發して、碇泊各船に配給する事に、官憲側の意嚮決定したから、比較的白米缺乏に對しては、最後の安心を有し居たものである。

四日、山城丸が救助船として神戸より入港、前日と同様荷役全く不可能なので、同船を三島丸に横付けし、食料竝に飲料水を水夫の手を以て、三島丸に船移した。三島丸船内約千五百の避難民は、此を見て歡喜し、落涙して聲を擧ぐるものすらあつた。其後山城丸に引續き、社船並に社外船續々來航し、海陸の罹災民何れも飢餓に瀕するの憂を除き得て、人心稍安定するに至つた。而して其後入港船増加の爲、社員の多忙は想像以上で、殆ど不眠不休、尙是れ足らざる有様であつた。其間關係官廳との交渉、復興會に出席各種參劃船内避難者に對する諸種の救援、及避難者輸送等に、全員を擧げて努力した其苦心は、蓋し容易の業でなかつた。斯くして神戸方面よりの該社救助船より、續々食料品飲料水を積移し、一方傷病者に對しては、船内に於て醫療の途を講じたが、避難者中神戸其他に避難を希望する者

は、各其の希望に従ひ、便宜各地行該社船に移して、無賃輸送を開始し、宮崎丸の如きは、三千五百名を搭載して、神戸に向はしめ、續々各方面に輸送を爲し、一方陸上狀態稍安定を見るや、避難者中には陸上に歸り行く者もあつた。三島丸船上宿泊者は、追々緩和せられたが、該社船にて各地行避難者は、依然三島丸を本據として、船待を爲す者多く、引續き毎日數百名の宿泊者があり、其後輸送打切りと同時に、自然滞船者残少した。

該社に於ては、前記の如く各船に多數の避難者を收容したが、之に要せし水及食料は、全部神戸より社船を以て輸送し、且つ各船内貯蓄の寢具は、全部提供し、陸上との交通には、當地に於ける該社小蒸汽全部八隻(震災の爲め所有小蒸汽十隻焼失し、東京より二隻回航せしめ、全部にて八隻にて活動したが、手不足の爲め)と、別に神戸支店より應急差向けられたる小蒸汽二隻とを使用して、絶えず往復避難者を運搬する等、一般避難者に對する慰安給養上、萬遺漏なからん事を期し、以て社會奉仕の職分を盡し得たのは、該社の欣幸とした所である。

尙前記三島丸には、夫々官廳の依頼により、横濱稅關港務部海事部の臨時事務所を置き、尙該社横濱支店の本部として、一時民衆救護の策源地たるの觀を呈した。

尙該社船にて、各地に無賃輸送を爲した員數、救恤品の輸送、並に陸揚配給高、及該社衛生部に於ける救護員數は、別表の通りである。



		(計)		二二、四〇二
名古屋へ輸送の分	九月 四日	阿蘇丸		四〇
函館小樽へ輸送の分	九月 七日	松山丸		
清水へ輸送の分	九月 八日	丹後丸	七〇	
	九月 十四日	丹後丸	一三六	
大阪へ輸送の分	九月 十四日	國後丸	三	
(總計)			三十四隻	二二、六九〇名

(口) 救護品輸送船

(横濱入港月日)	(船名)	(仕出港)	(積荷)
九月三日	阿蘇丸	古屋	救恤品、白米六〇俵、澤庵一〇樽、陶器五四。
同 四日	山城丸	戸	救恤品、白米二一五噸、麥粉二五〇噸、味噌一九〇樽、中白米五〇石(東京へ轉送)
同 四日	對馬丸	カムチャツカ	食料品(噸數不明)
同 五日	備後丸	戸	食料品(噸數不明)
同 五日	室蘭丸	阪	横濱揚、砂糖二九七〇俵(二〇〇噸)、梅干一〇〇樽(二〇噸) 慰問袋三一〇個。 東京揚、慰問袋一、二二三袋、白米九二一袋、其他食料品四三二個。
同 五日	宮崎丸	戸	白米六〇〇噸中三、三三八袋は、小樽丸を船側に横付け、東京へ轉送。
同 六日	熊野丸	戸	罐詰一、一二七個、白米六、五〇〇袋。
同 七日	鳥羽丸	阪	米六九、四五二俵、罐詰三、一二〇個、揮發油四九九個、カ1
同 七日	博多丸	屋	救恤品 一〇八噸。
同 八日	長崎丸	戸	救恤品 一、四四〇個。
同 八日	筑後丸	屋	救恤品、上海卵、木炭(噸數・個數不明)。
同 八日	神隆丸	戸	米一、八一四噸(芝浦揚)
同 九日	神瑞丸	戸	救恤品 一、八三六噸、米三六、〇〇〇袋、全部芝浦揚とせり。
同 九日	馬拉加丸	戸	救恤品 七四、三八三袋(六、〇〇〇噸)

日本郵船會社近海郵船會社の救護

九月廿九日	りおん丸	戸	建築材料 一五〇噸、尙筑波丸に炭水補給。
同 十月十日	國後丸	樽	松丸太 一一、七〇三個。
同 十月十一日	上海丸	戸	木炭・米・衛生材料二八二噸。
同 十月十一日	阿蘇丸	市	木炭・卵・米等、東京揚を合せ二、五七五噸。
同 十月十二日	博愛丸	阪	救恤品 六一三個、建築材料五〇噸、東京行二、六六〇個(横濱にて揚ぐ)。
同 十月十六日	第五大星丸	戸	白米五、三〇七袋、浪板五、〇〇〇個。
同 十月十八日	上海丸	戸	醫療器械一五噸。
同 十月十九日	昌福丸	浦	朝鮮總督府米二五、〇〇〇俵。
同 十月廿一日	りすほん丸	戸	小蒸汽船二隻、外建築材料及石炭七五噸。
同 十月廿一日	横濱丸	戸	木材・麥其他三、六八一噸。
同 十月廿五日	上海丸	戸	建築材料三〇噸。
同 十月廿六日	櫻島丸	水	東京揚慰問袋三〇二噸、米三、四〇〇袋、其他六三一噸。
同 十月廿七日	阿蘇丸	浦	玉子・木炭七〇〇個、ミルク外七八四、救恤品三、七四三個。
同 十月廿八日	第五大星丸	浦	砂糖外一、三五〇噸

九月廿七日より、臨時震災救護事務局囑託横濱現業部開設救護品全部同部に於て取扱ふことになつた。

(八) 臨時震災救護事務局囑託横濱現業部取扱解卸陸揚配給及貨車積高表

月	日	(解卸高)	(陸揚高)	(配給高)	(貨車積高)
九月	廿七日	七八八噸			
	廿八日	二、四七五噸	一、三八一噸	二四五噸	七五〇噸
	廿九日	二、四三四噸	二、八三九噸	三二七噸	八三三噸
十月	一日	三、七八二噸	三、〇八五噸	二二六噸	七五〇噸
	二日	三、九七一噸	四、七五二噸	九〇五噸	八三三噸
	三日	四、二八七噸	四、九三三噸	七〇六噸	九三三噸
	四日	四、九〇九噸	五、二二六噸	四八二噸	八一二噸
	五日	五、九〇七噸	五、一一一噸	四三九噸	六六五噸
	六日	一、三七六噸		五〇八噸	八〇噸
	七日	二、四三〇噸	三、九七二噸	七七六噸	五二〇噸
	八日	三、八一二噸	五、一五九噸	八四九噸	六一七噸
	九日	二、〇五八噸	三、二八七噸	九五一噸	五五一噸
	十日	一、二五二噸	一、九二六噸	一、一六一噸	五三二噸

日本郵船會社近海郵船會社の救授

十一日	九八三噸	三、二八七噸	四五〇噸	六五八噸
十二日	一、九四六噸	四、一一四噸	八八八噸	四七九噸
十三日	一、六九一噸	三、五七四噸	一、二一三噸	五二二噸
十四日	一、六一三噸	二、五七二噸	一、〇七九噸	六八七噸
十五日	二〇三噸	一五三噸	六八〇噸	八五噸
十六日	一、八六二噸	二、四三〇噸	七八〇噸	五〇三噸
十七日	二、〇六七噸	二、五八〇噸	七七七噸	四二四噸
十八日	一、七五〇噸	二、四一六噸	九一四噸	五六八噸
十九日	一、九六五噸	一、六六六噸	六三七噸	八五噸
二十日	一、二九八噸	二、三三二噸	五四四噸	一二九噸
二十一日	一、〇〇八噸	一、九五四噸	二四一噸	一四七噸
合計	五五、八六七噸	六九、三五九噸	一五、七八八噸	一〇、五八〇噸

三九六

廿二日以後解取未済船五隻此噸數約八、二〇〇噸  
同 水揚未済船五隻此噸數約四、三五〇噸

(備考) 陸揚高が解卸高に比し、一、三、五〇〇噸増加せるは解積の儘海軍より引繼きたる解数四十五隻此噸數三、六〇〇噸、本船より直接岸壁へ陸揚したる噸數約三、〇〇〇噸及解取のみ自營の上水揚は現業部に於て取

扱ひたる荷物噸數を合算したるに因る。

九月廿九日	九月三十日	十月一日	十月二日	十月三日	十月四日	十月五日	十月六日	十月七日	十月八日	十月九日	十月十日	十月十一日	十月十二日	十月十三日
二	五	二	二	二	一	二	二	三	四	五	四	三	二	三
歷山丸・運天丸。	長沙丸・長順丸・容丸(帆)・住吉丸(同)鳥羽丸。	第七萬榮丸・軍艦時雨。	大有丸・第二御崎丸(帆)	多摩丸・大島丸。	華山丸。	泰陽丸・北斗丸。	ソナム・野島・プレシデントゼファーンソン號。	泰山丸・尻矢・羅州丸・筑前丸。	華山丸・天洋丸・エルドリッチ・第三大信丸・上海丸。	アンデス丸・帝海丸・海照丸(帆)・富山丸。	千代丸・仁昌丸・長崎丸。	第一三共同丸・相模丸。	佐多・滿州・伊豫丸。	
(荷役終了月日)	(隻)	(噸)	(荷)	役	終了	船	名							

日本郵船會社近海郵船會社の取扱

三九七

十四日
十五日
十六日
十七日
十八日
十九日
二十日
廿一日

二	富士丸・長崎丸。
一	上海丸。
四	天武丸・海祥丸・パラナ・大洋丸。
一	金剛山丸。
二	關東・第二養老丸。
一	大榮丸。

三 震火災當時横濱在泊當社船にて救療せし傷病者數

震火災當時横濱在泊該社船中傷病者を救療せしは、三島丸、丹後丸、りま丸、六甲丸及鳥羽丸の五隻にして治療者實數は一千四人、内重傷者六十八人を算し、其延人員は二千五百八十人に達した。陸上の醫療設備全滅の結果、震災當初は三島丸及丹後丸の二隻に、各方面より重傷者の輸送甚だ多く、従業者は何れも殆ど不眠不休にて服務し、就中三島丸最も繁劇を極めた。今各船診療患者數を表示すれば、左の如くである。

震災當時横濱港在泊社船にて救療せし傷病者數及擔當船醫

(診療期間)	(船名)	(診療傷病者實數)	(内重傷者數)	(診療患者延人員)	(擔任船醫)
自九月十一日	丹後丸	二八八	九	七七六	大日方富丘、外調劑手一、看護手一。
自九月九日	三島丸	五〇五	五二	一、〇二五	瀧口南成、福岡作郡馬、外調劑手一、看護手二、看護婦二。
自九月十四日	六甲丸	七〇	四	三五〇	土肥政一、町田彦三郎、外看護婦二。
自九月九日	鳥羽丸	三	〇	一四	神岡邦夫。
自九月十一日	りま丸	一三八	三	四一五	町田彦三郎、瀬下良一郎。
計		一、〇〇四	六八	二、五八〇	

前表の外、長崎丸及上海丸の二隻、東京、神戸間就航以來、同船にて救療せる患者數、及九月十日より同廿一日迄、三島丸に於て救療せる患者數は相當多數に達した。尙前記の外、横濱支店臨時救護所開設以來、同所にて救療した患者數及擔任船醫は左記の通りである。

(診療期間)	(診療傷病者實數)	(内重傷者數)	(診療患者延人員)	(擔任船醫)
自九月廿二日	三九九	六	九〇二	福岡作郡馬・土肥政一、外看護手一名、書記補二名。
自十月卅一日				

#### 四 三島丸に官廳事務所を置きたる期間

横濱税關 九月十二日より廿八日迄  
 港務部 九月十四日より廿九日迄  
 海事部出張所 九月五日より六日迄  
 同十二日より廿八日迄

#### 五 横濱に於て震災當時一般民衆の救護に従事したる者の氏名

陸勤社員之部  
 支店長渡邊水太郎 以下計一百九十五名  
 小蒸汽船乗組員之部  
 柳丸 岩崎市郎兵衛 外三名  
 永代丸 網代安藏 外八名  
 雲雀丸 森三藏 外四名  
 鶴見丸 山口作太郎 外十名  
 業平丸 小川梅次郎 外九名  
 妙見丸 徳政馬吉 外七名

近海郵船株式會社社員

齋藤利也・外十一名

#### 六 就業復舊の顛末

一大震災の爲め京濱方面の通信機關が不完全となつたので臨機の措置として、當分の間本店事務の一部を神戸支店に委任處理せしめた處、大正十二年十月十日限り、之を廢止し復舊した。  
 一横濱支店事務は震災以來當社船横濱碇泊中三島丸内に假事務所を設け、取扱つて居た處、大正十二年九月二十一日、同市山下町三番館跡に移し、更に大正十三年六月、同市海岸通り三丁目十四番地に假事務所が新築落成したので、同月廿二日こゝに移轉した。

### 第三節 震災當時横濱港碇泊日本郵船株式會社

#### 船舶の救護狀況

當時の碇泊船舶左記の通り、  
 三島丸 丹後丸 六甲丸 リオン丸 りま丸 筑波丸  
 全市忽ち焦土と化し、人心安定を失ひて、到る所流言蜚語行はれ、秩序全く混亂せる際に、同社船三島

震災當時横濱港碇泊日本郵船會社船舶の救護狀況

丸以下の各船に收容せられた市民は恰も砂漠のオーシスにでも際會したが如き觀があつた。當日三島丸舟後丸の二隻は岸壁の崩壊と共に押出され、漸く比較的安全なる碇泊地點を得るや、炎々たる猛火に追はれつつ、逃れ來る一團の人影を認めたので、直に端艇を下して、人命救助に従事し、是を夫々本船に收容した。尙引續き舢舨又は小蒸汽船を以て前記各船へ避難し來れる民衆は數千に達し、同日以後、旬日に亘りて、宿泊せしめたる市民の數は萬餘に及んだ。就中三島舟後の兩船は、其威大なる收容力を發揮して、是等を收容し、尙餘りある數千名の市民を、六甲丸以下の四隻に配乗せしめたが、是等の大家族をして、意を安んじて宿泊せしめんが爲には、糧食、飲料、水、傷病者の手當等につき、深刻なる苦心を要したは言を俟たぬ。而し糧食、缺乏の危機も數日に迫つたので、他の社船便により、關西並に北海道方面より補給を得て、之を緩和すると共に、市民の秩序も漸く恢復したれば、是を陸上に、或は關西へと夫々避難民の希望に任せて取計ひ、茲に旬日にして一段落を告げたが、獨り三島丸のみは、税關港務部海事部の事務所及び當支店の本部であつたから、一時救護の策源地たるの觀を呈し、重大なる使命を果したのである。

斯くて當港に居る事月餘、最初より最終迄の救護船たる榮譽を擔ひて、本船は去つた。尙右各船當地入出港月日、及碇泊位置、並に救護に従事したる乗組員氏名は次の如くである。

救護船橫濱港入出港月日及碇泊位置 (其一)

(船名)	(三島丸)	(丹後丸)	(六甲丸)
入港月日	大正十二年八月廿六日	同 八月三十日	同 八月廿六日
出港月日	同 十月一日神戸向	同 九月八日神戸向	同 九月廿七日神戸向
碇泊位置	九號岸壁、其後十四號浮標	十號岸壁、其後十二號浮標	橫濱船渠會社汐入船渠、右出渠後第一區錨泊

同 (其二)

(船名)	(りおん丸)	(りま丸)	(筑波丸)
入港月日	大正十二年八月廿六日	同 八月廿三日	橫濱船渠にて新造竣成。
出港月日	同 九月十五日神戸向	同 十月十六日神戸向	同 九月十六日神戸向。
碇泊位置	五號浮標	橫濱船渠會社第一號船渠、右出渠後第一區錨泊、其後第五六號及第十二號浮標錨留。	橫濱船渠會社汐入船渠、右出渠後第十九號浮標錨留。

震災當時一般民衆の救護に従事したる者の氏名

碇泊船之部

三島丸  
船長 高橋榮次郎 以下百五十三名  
りま丸

震災當時橫濱港碇泊日本郵船會社社船の救護狀況



船長 越川重太郎 以下七十二名  
 筑波丸  
 船長 荒木田良亮 以下五十四名  
 りおん丸  
 船長 藤村總一 以下七十四名  
 六甲丸  
 船長 伊藤淺次郎 以下五十三名  
 丹後丸  
 船長 白鳥芝朗 以下百廿七名

#### 第四節 日本郵船株式會社神戸支店及大阪支店の採りたる救援業績

震災直後、日本郵船會社神戸支店及大阪支店に於ては、全力を擧げて救援事業に當つたが、今之を(一)救助品の輸送、(二)避難者の輸送の二項に別ち、其業績を概記しやう。

(一)救助品の輸送 救助品を積載して神戸出帆、罹災地たる京濱方面に向つた日本郵船會社及近海郵船會社々船は、其第一船として、九月二日、神戸出帆の山城丸本船は救助船として横濱入港の第一船

以下、九月末日に至る迄、合計二十一隻で、之に搭載輸送した救助品總數量は、二十八萬五千七百七十九個、及外に三百六十八噸で、別表参照、合計約二萬八千五百餘噸に達した。其出貨主の重なるものは、官廳方面に在りては、兵庫縣の約六萬四千個を最多とし、神戸市役所、京都愛媛岡山鳥取の各府縣、神戸税關内務省陸軍運輸部等に亘り、更に銀行諸會社其他に於ては、正金銀行、三菱、住友、友川、西川、崎並に大阪朝日新聞社、報知新聞社等の各方面及支那紅十字社等で、殆ど關西官公署銀行會社等の全般を網羅した。

斯くして日本郵船會社及近海郵船會社の救助船の配船は、震災直後に在りては、當時の碇泊船及將に其既定航海に就かんとした出帆準備船を、臨機救助船として差立て、其後九月十日以降に於ては、専ら京濱神戸間避難者及救援者並に救護物資輸送に努むるため、特に日支連絡の快速船たる上海丸長崎丸を其航路より引抜き、此定期航海の踐行をなさしめた。當時鐵路の交通は全く杜絶、或は甚しく不完全であつたので、各官公署の救護班並に罹災者の縁邊の救援に赴く人々は、競うて是の兩船に便乘を求めたので、是等輸送が與つて力あつたのは、否む可からざる所である。

(二)避難者の輸送 震災以來、汽船又は軍艦により、神戸に到着した避難者總數は、四萬一千餘人で、其内日本郵船近海郵船兩社船で輸送したものは、二萬二千四百二人を算し、其比例は全體の約五分四分餘に當る。就中九月十日、神戸に到着した宮崎丸の如きは、一船にて三千五百人を輸送し、避難者輸送船中の最大數を示した。而して是等各船の神戸入港に當つては、一々和田岬又は突堤に之を迎へ、其上陸に際しては、直に歸郷する者身寄に赴く者などの世話は、勿論、或は生田町三丁目所在の郵船屬員俱

樂部を開放して、一時の宿泊を望まれたる社外の避難者多數を之に案内し、救護又は傷病者の治療に努めた。又一旦神戸に避難した支那人中、歸國を希望せる向に對しては、神戸發日本郵船近海郵船兩社船便を以て、其多數を上海に無賃輸送の便宜を計つた。  
 此他大阪支店に於ては、是亦震災直後相次で救助船五隻を差立て救助品の輸送の爲め鋭意努力した。

参 考

(1) 日本郵船會社 近海郵船會社 船便輸送の上海上り支那人避難者數調表

(上海到着月日)	(船名)	(輸送支那人避難者數)
九月十七日	熊野丸	六五二
九月廿一日	千歳丸	六二八
九月廿四日	近江丸	一一二
九月廿七日	山城丸	二一五
同	千歳丸	一〇〇
同	熊野丸	五〇四
十月一日	熊野丸	一三一
(計)		二、二四一

右の外、十月一日以後、弘濟丸・博愛丸にて上海に輸送した支那人避難者、約一千人以上あつた。

(口) 日本郵船會社神戸出帆各船搭載震災救恤品明細表

(船名)	(神戸出帆月日)	(出貨主)	(品名)	(個數)
山城丸	九月二日	兵庫縣廳	白米	一、〇八五
同	同	同	麥粉	二、五三二
同	同	同	食糧品	四三八
同	同	同	其他	一九九
同	同	神戸市役所	白米・衛生材料	三六九
同	同	東神倉庫	玄米	六、〇〇〇
同	同	日本郵船會社	小蒸汽船	二
同	同	兵庫縣廳	白米	六、四八一
同	同	京都府廳	白米其他	一一〇
同	同	川崎其他	食糧・其他	九二
同	同	日本郵船會社	解船	三
同	同	住友	玄米	六、四七二
同	同	川西	同	一〇、三三六
同	同	東神	同	一三、三〇〇

日本郵船株式會社神戸支店及大阪支店の採りたる救授業績











十月十四日	二	九	五〇	一、三六七	一、三二七
同十五日	一五	三五	一、三三七	一、三三二	
同十六日	一二	一三	一、三六七	一、三四四	
同十七日	一七	六	一、三六七	一、三六一	
同十八日	六		一、三六七	一、三六七	
同十九日					
延 人 員				一一、五八二	

(日本郵船株式會社報告)

### 第五節 大阪商船株式會社の救援

大正十二年九月一日關東を襲ふた大地震の震動は、大阪方面にも可なり強く感じ、何處かに災害がありはしないかと、人をして何となく不安ならしめた。併し當日中には震災に關して、何れからも何等の通報なく、何等の情報もなかつたのである。然るに同日午後十一時三十分、神奈川縣警察部長がコレヤ丸から發した無線電信が大阪府に到着し、次で間もなく、同社は當時横濱在泊の社船ロンドン丸より、右と同意味の詳細なる無線電信を接受した。此二つの無線電信は、關東大震災を大阪方面に齎した實に最初の通信である。同社は海運業者として此危急に應ずべき使命の重大なるを痛感し、深夜社員の非常招集を行ひ、非常應急の方針を確定すると共に、大阪府廳内に於ける救護輸送の協議

と策應し、先づ救護船として、當時大阪に入渠し居た南米航路定期船シカゴ丸(總噸數五、八四八噸)を二日午後二時に、次で扇海丸を同日午後六時に、次でハルビン丸を三日午前十時に、次でアンデス丸を四日午後六時に、各大阪を出帆、關東方面に派遣することとし、之を大阪府大阪市並に市内外の關係者に通知したのである。而してシカゴ丸に救護班として、社員二十二名、醫員三名、看護婦五名を搭乗せしめ、更に食糧品、飲料水、其他手近に在りし救護材料を積載し得る丈け積載し、外に大阪府大阪市、大阪通信局海事部並に各方面よりの救護人員及材料を搭載し、京濱方面に出帆せしめたのは、實に當日の午後二時であつた。本船の出帆は、飛電の到達後、出帆命令を發してから、僅に六時間である。六千噸型の大船の出動命令を下してから、僅に六時間内に右の如き準備を整へて出帆せしめ得たことは、多年海運に従事して居たものでも、嘗て經驗せざる所であると云はれた。是は非常招集に應じた社員及關係者が、非常時に際し、異常の活動を爲したることを證明すると共に、非常時に處する訓練の存せしことに因りしものと思はれる。此の如くして、シカゴ丸は此震災時に際し、關西方面より差立てたる救護船中の第一船として、目的地に到着し、救護に従事したのである。

次で同社は救護第二船として、扇海丸を二日午後六時に、大阪を出帆せしめ、京濱方面に向はしめたのであるが、其後の通信により、震災の情況漸次判明するに及び、事態愈々重大なるを知つた。是に於て早速社内に震災救護輸送部を特設し、多數の社員をして、専ら避難者の救護輸送、並に各官廳の備上船及救護材料の輸送に當らしむることとした。併しながら一般の通信機關及陸上交通は杜絶し、僅に



無線電信や飛行機等に依て齎らす断片的の通信のみでは、震災地の實況を知悉し得ざるのみならず、各方面より東京灣に集中する社船を支配することが事實困難である。依りて之が支配と救護方法とを徹底せしむる爲め、同社専務取締役太田丙子郎氏は、三日午前十時、救護第三船として出帆した社船ハルビン丸(大連航路定期船總噸數五、一六九噸)に搭乗して、京濱方面に出動したのである。

而して横濱着後は、後に述ぶるが如き航程を以て、同船より社船パライ丸に轉乘し、主として東京方面の指揮を掌れる深尾専務と協力し、横濱東京二方面に配置した。東京灣に於ける同社の救護班を總へ港務部市役所税關等と交渉を開始すると共に、大阪本社並に各方面と連絡を取り、以て只管救護に従事したのである。

さて今回の震災に於て、政府及其の他の救護施設は、相當機宜の措置を爲したのではあるが、主として東京に行はれ、横濱方面は其施設救護の惠澤に浴すること甚だ薄く、罹災者は勿論關係當局は非常に困苦に陥り居たることは事實である。此實狀を看取した同社は、之に對する應急の手段に出づべく、社船の廻航、救護班の上陸、救恤品の陸揚配給等に関し、關係官廳に協力援助を乞ひ、極力目的の貫徹を圖つたのである。けれ共一旦杜絶したる交通通信機關は、遽に回復せず、港灣設備は破壊され、船舶人夫は容易に得られず、加ふるに稍もすれば、關係官憲が諒解せざること等あつて、尠からず困難を感じながら、左記の如き活動を敢てしたのである。

(一)パライ丸(欧州航路定期船總噸數七、一九七噸)、震災前即ち八月三十一日午後五時横濱に入港し、

第六號岸壁に繫留、翌九月一日揚荷中、彼の大地震に襲はれ、爲めに本船の繫留し居た第六號岸壁は勿論、附近の繫船岸壁の大部分陥没し、市内は各所に火災起り、震動止まず、危険を感じたから、直に機關を用意すると共に、危険を冒して千八百餘名の罹災者を船内に救助した。然るに風上に當れる附近の倉庫に飛火したる爲め、其の火焰に抵められ、船體愈、危険に瀕したので、繫留索を切断して、港外に避難したのである。爾後十餘日に亘り、多數罹災者を收容し居り、乗組船員は不眠不休、以て是等罹災者の救恤斡旋に努め、且全能力を發揮して、陸上罹災者に日々多量の炊き出しを爲す傍ら、船艙内に搭載しありたる八百餘噸の外米を、神奈川県に徴發により、之が解卸に従事したのである。震災當時本船乗組員が右の如き危険を冒し、罹災者の救助に奮闘努力し、他に類例なき多數の人命を救助したる功績は、永久に没すべからざるものである。就中本船乗組水夫福田信善氏の如き、自己の一命を賭して、救助に盡瘁し、遂に職に殉じた一事は、國民の龜鑑として、特に表彰の價値あるものと信ずる。

次に異變勃發以後、陸上は忽にして食糧の缺乏、恐るべき掠奪暴動の起らんとした際、官憲は、パライ丸に搭載せる外米を徴發し、之を陸上罹災者の間に配給した。之が爲め、左る不祥事を未然に防止し得たと云ふ一事も、亦特記すべき事柄で、パライ丸は實に横濱市民の忘るべからざる名前である。尙右の外、本船は横濱碇泊中、神奈川県及大阪府の救護本部に宛てられ、救護上多大の便益を與へた。

太田専務はハルビン丸より轉乘後、本船を大阪商船會社の救護輸送事務所に當て、芝浦埋立地に設置せる同社の東京救護輸送事務所との間に、毎日一回汽船第二大連丸を往復せしめ、連絡を保ち、京濱

方面に在る社船を統轄したのである。

同月十四日、右事務所を汽船富士川丸に移すに及び後事を他の社員に委ね、罹災者三百餘名を搭載して横濱を發し、同月十六日神戸に歸着した。

(二)ロンドン丸(歐州航路定期船總噸數七、一九〇噸) パリイ丸と相並んで、第五號岸壁に繫留して居り、一日の正午に横濱を出帆して、歐洲に向ふ筈であつたが、其解纜に先だち、震災に遭遇したので、パリイ丸同様、船體危險に瀕する迄、同所に留まり、二千餘名の罹災者を救助し、特に岸壁を離れんとした際、『御眞影』との叫びに態々船を止めて横濱市立横濱尋常小學校長等の捧持し來れる『御眞影』を本船に奉安し、同時に校長等を救助し、港外に脱出した。此救助に關し、山本横濱尋常小學校長が、特に感謝状を寄せて、本船及パリイ丸を賞讃せられた一事を以てするも、當時に於ける兩船の活動が如何に目覺しきものであつたか、蓋し思半に過ぎるであらう。

爾來本船は數日に亘り、避難者を收容した後、六百餘名の罹災者を搭載の上、同月五日午前零時三十分横濱を發し、六日未明大阪に歸着したのである。

(三)湖南丸(横濱高雄航路定期船總噸數二、六六四噸) 當時神奈川沖に碇泊揚荷中であつたが、事變後、前記兩船同様、罹災者の避難所に當て、且之に積載せし臺灣米數百俵を、神奈川縣の徵發命令に従ひ、陸揚した外、乗組員は晝夜兼行で、炊き出しに従事し、日々數回公園及山下町埋立地等に蝟集せる罹災者間に配給を續けた。

同船は五日夕刻、船内立錐の餘地なき程度に罹災者を搭載して出帆し、七日朝、大阪に到着したが、續いて兵庫縣廳に徵備せられ、救護品、主として食糧及被服類を滿載して、同月十二日、再び横濱に入港し、乗組員は兵庫縣より派遣されたる人夫と協同して、救護品の陸揚を急ぎ、同月二十日、其荷役終了後は、兵庫縣救護班事務所として、十月八日迄横濱港内に碇泊して居た。

(四)シカゴ丸 前記の如く、大阪府市及逕信局の救護班、新聞記者團、竝に本船救護班、其他便乗者を加へ、總計約二百四十名と、外に食糧及救護材料を搭載し、大阪方面よりの救護第一船として、三日夜横濱港外に到着したが、風波高かりし爲め、交通出來ず、翌早朝入港して、パリイ丸に横付けし、一部の人員及食糧を移してから、同日正午、直に品川沖に向ひ、同所に於て任務を果し、翌々六日、京濱兩地の避難者五百餘名を搭載して解纜、八日午前六時半、大阪に到着した。

(五)ハルビン丸 便乗者四百餘名と、大阪府の救護米、其の他百餘噸の救護品を搭載し、前記の如く、三日午前十時、大阪を出帆し、翌四日午後二時横濱港外に到着したが、當日は例の鮮人問題の發生した際、で四百名以上も乗て居る救護班、其の他の人々を、上陸させるは危険であると云ふので、其儘品川沖に廻航し、翌五日同所に於て風波強かりしにも拘はらず、危険を冒して、當時同所に在りし前記シカゴ丸に横付けし、積載糧食をシカゴ丸に移し、又大部分の人東京行を上陸せしめて後、横濱に回航し、同日夕刻横濱港を發し、七日未明、神戸に歸着したのである。

右シカゴ丸、ハルビン丸の荷客陸揚等に關し、當時品川碇泊中なりし軍艦富士、其の他の軍艦より便

宜を與へられ、爲めに尠からず能率を擧げ得た。

(六)扇海丸(東京九州航路定期船總噸數一、六六二噸) 本船に積載しありたる九州米の外、大阪府市兩廳出の救護品米、罐詰澤庵梅干、鹽鮭、パン等取合せ、合計四百餘噸を搭載し、二日午後六時、大阪解纜、四日夜横濱に到着したが、京濱に於ては、荷役進捗の見込立たざりしのみならず、横須賀方面は糧食全く缺乏し、悲惨の極に達せる旨の飛報に接したるを以て、各關係官廳と協議の上、横須賀に回航し、鎮守府長官と協力して、豫定數量の陸揚を了したのである。

同船は夫れから半數以上の救護品を残して、横濱に歸つたが、救護船舶が多數押し寄せて居るため、陸揚の見込立たず、遂に芝浦に廻航して、全部同地に陸揚の上、避難民を搭載して、十二日大阪に歸着した。

(七)アラスカ丸(日本紐育航路定期船總噸數七、三二八噸) 北米紐育に航行の途次、駿州清水港に碇泊中、震災に遭ひ、京濱在住者にして、當時同方面に出掛け居たる市民、其の他便乗者數百名を搭載して、三日午後横濱に入港し、次いで品川沖に回航し、便乗者を上陸せしめたる後、避難者七百數十名を搭載し、八日夕刻横濱を出帆して、大阪に引返したのである。

(八)アンデス丸(孟買航路定期船總噸數七、七七二噸) 大阪府市の救護米、食糧品及被服等、約二千噸竝に便乗者數百名を搭載し、六日朝、横濱に入港し、一部の陸揚を爲し、品川に回航し、海軍と協力し、荷役を強行して、漸く十三日終了し、避難者千餘名を搭載し、同日夕刻、横濱を経由し、大阪に向け出帆したが、

途中異常の暴風に遭遇し、四日市に避難して、大半の避難者を上陸せしめ、希望者のみ、同十六日大阪に到着した。

夫れより續いて大阪府に徵備せられ、ブラック材料約六千四百噸、竝に舁及人夫等を搭載して、同月廿四日、大阪を出帆し、廿六日再び横濱に入港し、破壊せる第五號岸壁に繋留して、揚荷に従事し、十月九日終了後、直に出帆し、同十一日夜、大阪に歸着した。

當時各方面よりの救護船は、陸續として入港し、百餘隻の艦船は、東京灣に溢れ、何れも自船積荷の陸揚されんことを渴望して居るが、一方倉庫は大部分焼失して、荷物の收容場所なく、加之、舁及人夫は極度に缺乏して、何れの船も倉庫代りに使用せられ居る中に、獨り本船は十隻の舁と百名の人夫とを、大阪より連れ來り、極力荷役を急ぎたる結果、季節漸く晩秋に入り、市民の最も熱望せるブラックの建設を特に早からしめたる同船乗組員の功績は、蓋し尠からざものと信ずる。

(九)北京丸(横濱高雄航路定期船總噸數三、〇一一噸) 米、亞鉛板、慰問品、食糧、及逕信局電線工事要具類等三千餘噸を搭載し、七日大阪發、九日朝、横濱に到着したが、人夫及舁なきたため、社員を各方面に走らせ、無理に舁を曳き來り、船員をして荷役せしめ、一部の陸揚を行ひ、十二日朝、品川に廻航し、夫れより房州館山方面の救護に向ひ、十月八日、任務を果して、同十二日大阪に歸着した。

(一〇)銀山丸(總噸數一、七〇七噸) 大阪府徵備船として、米千百噸を満載し、外に便乗者を乗せ、九月十日未明、横濱に入港後、舁及倉庫拂底のため、荷役捗らず、再三京濱間を往復し、極力荷役進捗方奔走した

る結果九月三十日に至り終了、歸阪した。

(一)長沙丸(大阪天津航路定期船總噸數二、五四〇噸) 米被服慰問品總計二萬六千餘個を滿載し、九月六日大阪發、八日横濱經由、芝浦に到着し、揚荷後大阪府の事務所宛て、數日間芝浦に碇泊後、多數避難者を搭載し、九月十九日、大阪に歸航し、再度大阪府に徵備せられ、建築材料及慰問品千四百噸を搭載し、九月二十三日、芝浦に着し、京濱兩地に揚荷し、十月六日、大阪に歸着した。本船は二航海とも便乗者を搭載した事は勿論である。

(二)アルタイ丸(歐州航路定期船總噸數七、七七二噸) 京濱兩地揚建築材料六千三百噸、及便乗者を搭載し、九月十七日横濱に到着し、十月四日、荷役終了、同六日大阪に歸着した。

(三)名瀬丸(總噸數一、二一八噸) 熊本逕信局の救護品千二百噸の外、便乗者を、又大義丸は熊本逕信局長崎縣、長崎市、鹿兒島縣、福岡縣等の救護品一萬二千二百四十三個、及便乗者五十四名を、又東晃丸は陸軍糧秣廠の救護品千五百三十二噸、及便乗者三十名を、各搭載し、門司方面より京濱地方に往復した。

(四)北米南米又は紐育航路に従事し居たる各船即ちアリゾナ丸、カナダ丸、マニラ丸、ハバナ丸等特に横濱に寄港せしめ、各船共に數百名の避難民を阪神方面に輸送したのみならず、阪神より各地行の避難者は、同社内外航路船により、各目的地に輸送した者亦極めて多數であつた。

(五)第二大運丸(總噸數九九六噸) 震災以來同社の救護輸送事務閉鎖まで月餘の間、京濱兩地間の連絡船として、日夜の活動を續け、船員の奮闘努力、實に非常なるものがあつた。特に九月五日、品川沖

に於て、同船乗組水夫小關氏が職に殉じたのは、特筆に値する。

(六)富士川丸 特に同社横濱支店事務所に當る爲め、同地に派遣し、九月十三日以後山下町に最も接近せる浮標に繋留し、之を根據として、我社員及救護關係者は、關係各官廳及當業者と往復折衝し、救護事務に盡力したのである。

(七)救護班の活動 前に一言せし如く同社派遣救護班は、横濱着後之を東京横濱の二手に分ち、各其の方面に向つて活動を開始したのである。

横濱班は其の事務所を横濱在泊の社船パライ丸に置き、九月五日より東京班と同様なる組織の下に、同様の方法で、或は炊き出し、或は陸上救護、或は罹災者の收容、若くは收容者中の患者に對する診療、或は避難地への輸送等を開始したのであるが、如何せん官憲其他一般の救護施設は、殆ど東京のみ集中された形で、横濱方面には急速に及ばなかつた爲め、陸上との交通は勿論、物資の陸揚配給に困難ありし等、種々なる障害により、多大の困難を嘗めたのである。而も罹災者は、陸續押し寄せて、物資の供給又は診療、若くは船内への收容、避難地への輸送を求むる甚だ急であり、且つ荷役進捗せざりしが爲め、當時多數の船舶が港内に輻輳して、船舶の配置運行上、危険を感ずる等、一層困惑した。併しながら此間に處し、班員は比較的、多からざる人員を以て、港内在泊の社船乗組員、及船醫等と協力し、非常なる努力の結果、總ての方面に於て、多大の成果を挙げ得たのである。

尚横濱に於ける救護輸送事務所は、パライ丸横濱引揚後は、富士川丸内に移して、執務を繼續した。

とは、前に一言せし通りである。

彼上の如く、右京濱救護班は、二旬の長きに亘り、種々の困苦缺乏に堪え、殆ど露宿に等しき生治を續けながら、罹災者の爲め健闘したのである。

前に概説した如く、我派遣救護班員及船舶乗組員が、危険を冒して、長時日の間、罹災者と同様の困苦缺乏に堪え、依つて以て此大震災の救護及輸送の重大任務を全うし、他の同業者に劣らざる成績を擧げ、而して義勇奉公の誠を致し、海運業者の使命を辱しめなかつたのは、我等の欣幸とする所である。

尙参考の爲め右震災輸送に関する同社の成績概要を記せば、左の通りである。

(イ) 救護使用船 總數二十四隻、此總噸數一〇八、〇〇〇噸。内官廳備上提供船及罹災者輸送船二十一隻、此總噸數九八、五一一噸。

(ロ) 無賃輸送罹災者 九、六二三人。

(ハ) 無賃輸送救護員(阪神京濱間) 三五二人。

(ニ) 無賃輸送救護品及材料(阪神京濱間を除く各港間) 四、〇七〇噸。

(大阪商船株式會社報告)

### 第六節 其他碇泊諸船の救援行動

その他船舶も亦必死の活動により、多數の避難者を救助したことは、永く銘記すべきである。

左にその諸船の收容數を表示すれば、

(船名)	(收容人員數)	(備地)
中華丸	八十八名	第一區
日英丸	百八十名	同
甲陽丸	二十二名	同
富元丸	五十五名	浮標九號
大明丸	四十四名	第一區
大進丸	十名	第二區
索海丸	五十五名	第一區
華山丸	鮮人七十四名	同

其他、夕張丸、寶永丸、六甲丸、リオン丸、リマ丸、鳥羽丸、筑波丸、鹿山丸、東華丸、湖南丸、榛名丸、シドニー丸、スマニヤ丸、シンガポール丸、嘉代丸等の活動も實に目まじきものであつた。(海軍参考鑑抄)

## 第六章 諸外國の應援と艦隊の救援

今回の震災に對しては、列國齊しく多大の同情を寄せ、競うて救済物資を贈り、或は特に代表者を派して慰問せらるる等、甚だ懇篤なるもので有つた。

諸外國の應援と艦隊の救援